

崔書勉の提案

東京・四谷の初等科から学習院中等科に進学した私の学級は壊滅した首都東京中心部を離れて武蔵小金井に移り、教員練成所跡地の貧しい木造平屋校舎で戦後の本格的教育を受け始めた。昭和二十一年春である。校舎の東隣りにはこれも横長の木造平屋建て東宮仮寓所が並び、皇太子継宮明仁親王が住みついた。さらに東に紀元二千六百年式典（宮城前）で使われた光華殿が移築されており、西側一部は東宮学問用に利用されていた。

通勤時間は私の場合鎌倉に住んでいたため片道三時間と長く、往復で言えば滞校時間より余計かかる勘定だった。ろくに窓ガラスもはめてなく、出入りは窓からという満員電車を乗り継ぎ武蔵小金井駅に到着すると、さらに徒歩で三十分田舎道を歩かなければ校舎に行き着かない。

新入生のなかに藤島泰輔がいた。デメキンと言えるほど目玉が大きく、一組から三組まである教室で一度も同室にはならなかったけれども、ませた少年だった。不良仲間の常連であり、校舎の影でタバコを吸っていた。気の利いた“不良”ならばクラリネットやトランペットあるいはギターなど楽器にのめりこむのだが、軟派の泰輔はよれたレインコートを身にまとい、襟を立て、よたつて歩いた。

藤島泰輔は学習院大学を卒業する前年秋に相当量の小説を脱稿した。頼まれて私は彼に同行し出版社を訪ねては売り込みを図った。講談社に向いたときだった。応対した編集長はでっぷり型の人を見下した態度を見せ、横柄さにむかついたが、怒ったら話にならない。

「だめだよ、これは。とても出せたものじゃない」

まったくにべもない。ばらばらとめくり読みされてこの発言だったから藤島は蒼白になった。手先が震えるのを必

死で抑える姿にあわれを催した。だが、その場をとりつくりつて私は藤島を立たせ、この人との会話を打ち切った。

先輩である三島由紀夫は逆に絶賛を惜しまなかった。ありがたい意見を手中にして奮い立った藤島はついに文藝春秋社から出版許諾の確かな契約を貰う。昭和三十一年春、本は形になった。「孤独の人」である。私は共同通信社に入社し社会部配属となった。藤島は東京新聞社に入社した。出社した当日から東京新聞編集部のありつただけの電話器は藤島宛の電話に占領された。文中次のような描写が話題のタネになったと思われる。

— 級の中には人と人との友達関係を示す数多くの線があった。その多くは明らかに親友と呼べる関係の線だった。それらの線はふだんは頑強なまでに強靱にむすびついていた。それがこと宮をめぐる利害関係になると、化学変化のように飛びはね、もつれあい、そうして結局はばらばらになってしまう。その例を良彦（泰輔）はいくつも見た。— 同級内の人間関係を皇太子を中心において観察したのがこの本の中身だった。泰輔にとって平等の立場とは誰とも等距離を保つことであり、したがって差別なく交際するのが宮の務め、ということになる。皇太子はこれを人間否定と受け取った。級友の誰かを好きになることは自然の流れであり、きわめて人間的なありようだ。

メディアは新鮮な見方を「孤独の人」に発見し、藤島から談話をとろうとした。彼の勤務は僅か四日で終わる。本来取材に走り回るべき記者が取材対象にされたのでは、周辺が黙ってはいない。初めての作品がベストセラーになる。彼は小説家として徹する道を選ぶ。

一九七〇年台初頭、藤島泰輔は日本ペンクラブの会員になり、芹沢光治良会長、阿川弘之専務理事、石川達三・高橋健二・中屋副会長の時代に理事に就任した。一九七三（昭和四十八）年五月、藤島はストックホルムで開かれた国際ペン執行委員会に出席している。その前年ユネスコ総会・理事会で中国代表が「非政府機関であろうとも台湾代表を入れるべきではない」と主張しており、国際ペンでも台湾ペンセンターの処遇を議題としたのだった。

「各国ペンセンターはペン憲章に賛同する承認された作家のみによって成立している。であるから政治的な考慮はすべきでない」国際ペンは明快だった。このような配慮は必要ないとしてユネスコ事務局に差し戻した。

このころアレクサンドル・ソルジェニーツインの新作「収容所列島」に対する弾圧事件が発生した。ソ連最高会議幹部会議は彼から市民権を剥奪、国外（西ドイツ）追放を決めた。芹沢会長と高橋国際委員会委員長はブレジネフ書記長、コスイギン首相、ソ連作家同盟に抗議文を突きつけた。

時代の動きが平和で穏健な団体に波及するケースは、団体会員が抱く市民意識を大きく傷つけられたとき、より鮮明な姿を伴って現れるものだ。特に言論、表現、出版の自由が脅かされたとき、あるいはおびやかされるような状況が起きたとき、作家、思想家、編集者、出版関係者が抱く危機意識は「闘争」に質を変えていく。

朴正熙が自己の軍人的発想に舞い戻り、国のためという美名に隠れて自分の価値観擁護に異常な関心を寄せ、反対者を排除し始めた「維新革命」が起こると、市民生活は非常戒厳令の下で圧迫された。時局を鋭く風刺する「五賊」が発表されると七四年四月警察は作者を全国指名手配する。こうして朴政権による韓国詩人金芝河（キム・ジハ）の逮捕、投獄事件が起きた。極刑を憂慮する空気が国際的に広がり始め、同年五月に開かれた日本ペン緊急理事会に大きな衝撃を与えていく。

事態の推移を見極めてから行動しよう。日本ペンは直ちに抗議することを避け、可能な限り情報を集めてから態度を決め、国際ペンに報告する態勢を整えた。日本ペンの国際委員会委員長だった高橋健二が欧州旅行に出ていることも先に延ばした理由である。ソウルの非常軍法会議は七月十三日金芝河に死刑判決を言い渡した。金達寿、李進熙ら在日朝鮮人作家はキム・ジハラを助ける会と呼応し、釈放を訴えてハンストに入った。日本ペン国際委員会は七月十六日高橋委員長、加瀬英明、斉藤襄治、白井浩司、藤島泰輔各委員それに崔書勉準会員（東京韓国研究院）が出席して開かれた。

韓国ではこの体制下、軍事裁判責任当事者は徐鐘喆国防部長官であり、減刑の権限を握っている。金芝河助命を要請する電文「日本ペンクラブは、貴国の国際的詩人金芝河氏の運命について重大なる関心を寄せている。氏の生命を救うために閣下の特別な考慮と寛大なる処置を要望する」を翌十七日打電した。

参考人の立場で国際委員会に出席した崔書勉は発言を求めた。どうぞ、と許され、崔は自分の意見を述べた。

「韓国の裁判は厳しい判決をするが、周囲の反応をみて減刑する傾向があります。このさい、減刑要請に韓国に行けば効果があります。私は国際委員の中で韓国通とみられている藤島理事が減刑要請のため至急訪韓し、国防長官と会って面談するのがいいと考えます」

高橋の「PEN随想」によれば、かなり強い主張であった。崔書勉は韓国人であり、日ごろ、韓国駐日大使よりも実力を備えた人物というイメージで扱われていたことから、崔発言は重視されるのである。石川達三、高橋健二両副会長と藤島理事は別途協議し、訪韓趣旨をしたためた速達を全理事に出して承認を得ることとした。電話で回答をもとめたところ、ほとんど反対はなかったという。

言論弾圧に非ず

国際的抗議の高まりが効を奏したのか、七月二十日金芝河は無期懲役に減刑された。これを見て石川、高橋はペン事務局に「死刑を免れたのなら急いで訪韓する必要はない、見合わせたらどうか」と連絡した。しかしこういう場合すばやく行動に移す崔書勉のこと、藤島と白井浩司理事への渡韓準備はすべて整っていた。井口順雄事務局長も含めて三人、韓国まで行けばなおいっそう減刑の方向で働きかけることができるとし、両副会長の判断は棚上げて三人は韓国に向け旅立った。

ソウル入りした三人は韓国ペンクラブの白鉄会長、李奉来副会長ら幹部、国会議員・与党文教委員会委員呉周煥、新民党代弁人蔡汝植らと精力的に面談する。一連の会見で韓国側が示した見解は、①金芝河の逮捕は政治活動に対して行われた②直接彼の文学作品を槍玉に挙げてなされたものではない—にあり、この見解を一貫して通した。特に蔡議員は「起訴状の冒頭に彼の詩作品「五賊」「蜚語」が記されているのは人物紹介のために過ぎない」と主張した。

藤島が白井理事と共に国防部を訪ね、徐長官と会ったのは七月二十九日である。握手を終えると長官は「日本ペン

クラブからの電報は、裁判に携わる私たちに深刻に考える余地を与えてくれた」と述べた。これに対して藤島は礼を述べ、いつそうの減刑を要請した。ただし、この部分は新聞報道では「藤島理事は金芝河が無期懲役になったことについてお礼を言上するために国防部長官を訪問した」とされ、物議をかもし原因となる。さらに徐長官は藤島らに、キム・ジハの逮捕が北朝鮮の脅威、南北の軍備力、民青学連事件と関連づけるような経過説明をした。

このあたりから齒車が狂い始めている。長官訪問が終わりホテルに帰ろうとした日本側理事二人を白鉄会長が引き止め、「韓国の記者たちが会いたがっているから、ちよつとでいいから顔を出してほしい」と頼み込んだ。全く予定にない会見だったので二人は気が進まなかった。だが、白鉄会長の要請を突っぱねることもできず、断りきれずに韓国ペンクラブに行く羽目になってしまう。待ちかまえていたのは韓国人記者だけではなかった。日本の特派員たちもあらかた顔をそろえていた。飛んで火にいる夏の虫であった。藤島のナイーブさ、ガードの甘さも手伝って、しゃべらされ、誘導され、思わぬ結果を招いてしまう。

「金氏に死刑判決が出たため、日本ペンクラブは七月十七日助命嘆願の電報を打ったところ、二十日に無期に減刑された。このため国防相に会ってお礼を申し上げるのと、事件についての韓国ペンクラブのお考えを聞くのが目的だった」

さらに戒厳令下という日本では想像もつかない抑圧にさらされている現状を深く読み下すこともせず、お世辞を口走る。

「日本で報道されている以上に韓国政府が文化政策を重視し、文化人を大切にしていることがわかった」

翌日の新聞見出しに「訪韓の日本ペン代表語る、金芝河氏無期判決、言論弾圧と言えぬ」（読売新聞七月三十日朝刊）などが派手に踊った。では二人の理事は記者会見で何を語ったのだろうか。「日本ペンクラブ五十年史」が取り上げた記録にその内容をたどってみよう。

恐らく日本ペンも和紙報道だけに頼ったかと思われるが、①金芝河が処罰されたのは文学活動のためでなく、国家

転覆資金を民青学連に渡した政治活動のためである②したがってこれは言論弾圧ではない③金芝河事件が言論弾圧と誤解されないよう国際ペンに報告するつもりだ、と発言したことになっており、「当局側の説明を代弁した感じに終わっている」。

藤島はさらに自分の発言内容を次のように説明した模様である。

「金芝河が無期懲役に減刑されたことに“お礼”といったのは、あくまでもいっそうの減刑を要請するためのマクラのつもりだった」

日本ペンクラブが減刑要請のため韓国を訪問したと受け止めていた記者側は、そこにお礼という言葉が出たことを重く見たものと思われる。ニュアンスの差が記事に反映された。ソウル発の記者会見報道は日本ペンの体質を疑わせる内容をはらんでいたため、大きな騒ぎとなった。

三十日午後帰国した藤島、白井両理事は日本ペンクラブに集まった七十人余りの報道関係者に捕まり、一問一答を繰り返した。助命嘆願電報の打電から訪韓までの経過を説明した藤島は韓国における調査活動について、

「ゆき過ぎた行為をすることによって韓国ペンクラブに迷惑をかけてはいけないという点に最も神経を使った。韓国ペンが今度の事件を政治的事件と見ている以上、私たちもそう考えざるを得ない」と、答えた。

白井理事はこう発言した。

「ソウルに行って日本ではわからなかった“北の脅威”を強く感じた。現在の政治体制を自由・民主的であるとは思わないが、今回の事件はある程度やむを得なかった」

朴軍事政権支持とまでは踏み込まないにせよ、作家二人が韓国政治体制に理解を深めた認識の吐露は衝撃を与え、波紋を広げた。一般社会に与えた影響もさりながら、日本ペンクラブ会員が自らの意思で退会通告に走り、ペンクラブの組織上崩壊をもたらす勢いとなる。まず有吉佐和子が事務局に退会を告げ、その理由を報道各紙に談話の形で発

表し掲載された。これに習ったのが司馬遼太郎理事、安岡章太郎理事であり、八月二日までに瀬戸内晴美、水上勉、黒岩重吾、立原正秋、瀬沼茂樹、宗左近、寺山修司ら会員が続々退会していった。

異常事態を前に芹沢会長はジュネーブにて静養中だったが、東京にいた令嬢が電話で容易ならぬ問題が起きたと告げる。事務局からも八月五日緊急理事会を開くと連絡が入った。旅行シーズンのためすぐには航空券が手に入らず、芹沢会長は声明文を書き上げ、電話を通じてこれを発表した。朝日新聞所載七四年八月三日付けによると内容は次の通り。

「この一兩日、東京からの電話で、日本ペンクラブの理事二人のソウルに赴いた結果が、日本のジャーナリズムに大きな波紋を起していることをはじめて知って驚き、心を痛めているところです。

かりに韓国ペンクラブの要請があっても、現地で言論表現の自由が抑圧されているかどうか調査するには、現在の韓国の情勢では困難であり、あらかじめ十分な用意と細心の注意とが必要であって、その用意なしに二人の理事が韓国に赴いたことは悲しいことであつたと考えます。

そのうえ二人のソウルでの発言と行動が多くの新聞や電話が伝えるものであれば、これはまったく国際ペン憲章に従って言論表現の自由のために活動してきた日本ペンクラブの精神と伝統に反するものであつて、伝えられるところが何かの誤りではないかと、わたしは疑うくらいです。しかし、それが誤りでなく事実とすれば、二人の発言と行動は、二人の個人的なもので、日本ペンクラブでの理事会も関知しないものだとなつては信じます」

野間宏が議長に、堀田善衛が事務局長にあつた日本アジア・アフリカ作家会議は日本ペンクラブに対し抗議文を送りつけた。

訪韓両理事がソウルの記者会見で「金芝河氏への有罪判決は文学活動ではなく政治活動に基づくものであり、したがって文学活動に対する言論弾圧ではない」と発言し、帰国後の記者会見でも同趣旨を繰り返したのは、日本ペンクラブが先に行った金芝河への助命嘆願と矛盾するばかりでなく、詩人金芝河に対する冒瀆である……。

組織上の危機にまで及んだ事態をみて驚いた韓国ペンは白鉄会長を八月三日日本に送った。石川副会長ら日本ペンクラブ関係者に事情を説明するためだった。訪問を受けて五日、ソウルでの記者会見時の事情などを聞いた後、石川、高橋、中屋副会長、三浦朱門常務理事は午後四時から七時まで緊急理事会を開いた。出席したのは阿川弘之、巖谷大四、遠藤周作、大久保房男、杉森久英、田辺茂一、徳田雅彦、中村光夫、新田敏、原卓也、村上兵衛、村松剛、矢口純、安岡章太郎、山本健吉。このほか当事者である藤島泰輔、白井浩司だった。

席上、井口事務局長は藤島、白井両理事から理事辞任届が出ていと述べ、討議し、次のような結論を確認している。

- 一、訪韓団発言は個人的見解であり、日本ペンクラブの統一見解ではない。日本ペンとしては韓国に言論の弾圧があると思う。韓国での記者会見自体は訪韓団が犯した手続上のミスである。
- 二、今後の收拾策は理事会の責任問題を含め、芹沢会長帰国後結論を出す。理事の辞任届はそれまで石川副会長預かりとする。

野坂昭如、村松剛らの動き

三人の副会長が記者に会ってこの確認事項を示したが、新聞報道は責任回避に懸命（毎日新聞）、逃げ逃げペンクラブ（読売新聞）などともに取り扱わなかった。石川達三が責任追及を避け、かばうような姿勢を見せた点は逆に注目されたようだった。九月九日会長帰朝、翌十日の幹部会議で日本ペンクラブ再建委員会を発足させる方針を打ち出した。また芹沢会長は再建委員会発足を期に辞任する意向だと進退問題に触れ、さらにペンの理念は思想・言論の自由擁護と文化交流の二つだが、これからは言論の自由を守ることに努力すべきだと述べた。いわば原点に帰って再生しようと呼びかけたものである。

これまで外野席で発言していた生島治郎、五木寛之、野坂昭如、藤本義一、三好徹の五人はそれぞれ仲間と語らい、



川上宗薫、早乙女貢、半村良も参加して日本ペンクラブに大量入会しようという動きになった。新しい血を注入し、体質を改善し、理事会メンバーを一新するという彼らの意向は衝撃的だった。

理事の一人村松剛は崔書勉の滞日三十年（一九八七年開催）記念の集いで司会役を担当するなど大変崔書勉と親しい文学者だった。村松は黛敏郎、藤島泰輔と鼎談に名を連ねるなど、藤島とも深い交流を維持していた。だが、「実はね、村松は藤島とは二度と同席しない。相容れない人物だと私に言うようになった。私は、自分と藤島君とは信頼関係で結ばれており、君がそういつてもこの関係をひっくり返すようなことを私はしないよと釘をさした」と、崔書勉は筆者に何度も語っている。日本ペンクラブの事実上の崩壊が藤島泰輔の訪韓と発言を原因として発生したことは、脱退、退会文士はいざ知らず、多くの会員がいつせいに藤島に背を向けた意味になる。

突き詰めれば藤島がもともと持っていた保守的色彩が金芝河問題で剥きだしになったことが騒動のきっかけである。それだけに、藤島がのさばるような日本ペンはいらない、改めなければならぬ。そういう機運が一気に噴き出した形であった。二十五人に達した入会希望者の中には、小中陽太郎、阿部牧郎、飯干晃一、石堂淑郎、井上ひさし、長部日出雄、川崎洋、新橋遊吉、鈴木いづみ、田辺聖子、佃実夫、筒井康隆、堤玲子、本田靖春、眉村卓、宮原昭夫、森村誠一が挙げられる。

個人が加入する建前を守りたい石井らは集団加入という形の手続きになじめず、扱いを十月二十四日の緊急理事会まで保留とした。そこでようやく入会を承認し、同月三十日東京會館で臨時総会を開いた。爆弾発言をやったのが野坂昭如だ。

「土岐雄三常務理事の財政報告にあるように財政的に苦しいペンの訪韓代表たちがなぜファーストクラスで日本―韓国を往復したのか説明を求める」

高橋副会長は、「金芝河が死刑から無期に減刑されたので訪韓は必要ないと思っていたが、二理事が手続きを終わっていたし、さらに減刑されればよいと考えて送り出した。しかしファーストクラスで行ったとは知らなかった」と

説明した。芹沢会長も「これまで国際大会へ出るのでも手弁当で出席する形だったのに……」と発言した。

小中陽太郎は別の角度からペンを批判する発言をした。

「私はA A作家会議と金芝河氏らを守る会（小田実代表、井出孫六、大江健三郎、袖井林二郎、日高六郎ら）の一員として八月の緊急理事会に抗議の公開質問状を提出したが、ナシのつぶてだ。正規の団体が質問状を出したら回答ぐらい出すようにしてほしい。もっとオープンな運営を」

筆者は藤島泰輔がこの時点で作家として死んだと思う。このままでは朴大統領を擁護した文化人として、色目で見られるしかないであろう。韓国の為政者にとっては現体制の日本人理解者としてありがたい存在になり得るかもしれないが、日本で足場を失ったのであれば、そのような評価は一文の得にもならない。彼は全てを失った。

荒正人、北條誠、黛敏郎、桑原武夫、山本健吉、円地文子など三十五人が再建された日本ペンクラブ理事に就任し、定款の目的にある文言「言論の自由を擁護し」を「言論、表現、出版の自由を擁護し」に変えた。

臨時総会は第六代会長に中村光夫を選ぶ。当日決まった他の人事は山本健吉の副会長、佐伯彰一の専務理事、杉森久英の常務理事で、旬日を経ずして副会長に桑原、常務に土岐が加わった。補充理事には奥山益朗、新田、矢口純、五木寛之、野坂昭如が入った。こうしてペンは再建され、過去四〇年の歴史を一区切りとして再発足した。一九七五年五月には新会長に石川達三が就任した。村松は野坂、土岐とともに常務理事に選ばれた。

新人の大挙入会は侵略に近い。「四畳半襖の下張り」で出版社締め付けの動きを出版の自由への脅威と受け止めている野坂昭如を例にとれば、石川達三が考える「自由には二つある」信条（七五年六月二十日）と真っ向からぶつかるしかない。一步も譲れない第一義的な自由と、ある程度譲歩・妥協できる自由があると思うのは、法治国家に住む以上社会秩序との協調は止むを得ない。これが基本的な石川の立場だった。

新会長の発言から類推すると、「藤島泰輔は若いながら完全な自由などありはしないとの立場において韓国の現状を肯定した人物」という“わけあり論”に立ったことになるだろう。食らいついたのは小中陽太郎、五木寛之、早乙

女貞、三好徹ら十五人の有志会員だった。「石川会長発言は、ペン憲章からいつて承服しがたい。これがペンクラブの総意だと思われては困る」のだ。言論の自由はあくまでも一つであるのが大原則と主張する若手のアジリ方はアンボ闘争を実地でこなしてきただけに政治的とすらみえた。彼らは会長が「日本ペンは金芝河問題に振り回されている感じがある。政治的問題は避けたい」と発言したとき（七六年四月八日）、彼ら改革派を代表する形で野坂は会長批判を激越に展開した。下張り裁判で有罪判決を受けた直後だったこともあり、反論に立ち上がった石川会長は「野坂君は軽率な自由の行使によって、自ら自由の一部を失うと同時に、我々文筆人の持つ自由もまた、その一部を今度の判決によって奪われた。真に守らなければならぬ自由のためには、ある程度自主規制しなければならない」と述べ、一歩も退かなかつた。

野坂らは日本ペンを全学連並みに扱った嫌いがある。大人の、文学を大切にする豊かな素地をひつかき、傷つけたのは跳ね上がった彼らの行き過ぎと考える。

肝心の金芝河は七五年二月十五日朴大統領の「刑執行停止措置」によって十数ヶ月ぶりで出獄した。直ちに「苦行―一九七四年」を発表し、日本向けに「反独裁・韓国連帯」のアピールを出したところ、三月十三日再び逮捕された。日本ペンとしては、国際ペンと韓国ペンクラブに電報と書簡を送り、重大な関心を表明した。韓国ペンは再逮捕の直後執行委員会を開き、「一刻も早い解放と、治療を受け、作家活動を続けられるようになることを希望する」趣旨の決議を出した。公判を傍聴して少しでもペンの姿勢を示そうという国際ペンの提案を容れ、土岐常務理事と大野明男オプザーバーが韓国を訪問したのは七六年三月だった。二人に対し、韓国側は「詩人金の逮捕は反共法違反を理由としている。言論・出版活動に対するものではない」とかつて藤島に伝えたのと同様の主張を展開した。

一連の動きに対して日本ペンが金問題に振り回されている、もう願い下げにしたいと石川が発言したのは七六年四月の理事会席上だった。その後ことあるごとに大いに不快感を表した石川達三だったが、ついに会長職を退いた。七

月一日、高橋健二が第八代会長就任を受諾した。さらにいえば、金芝河は結局生き抜き、自由を得ている。

日本ペンクラブが初めて国際ペン大会を東京で開催したのは一九五七年、川端康成会長の時代だった。共同通信社社会部遊軍記者だった筆者は日夜この行事に出席し報道した。イタリアから「仮想舞踏会」「ローマの女」などの著者アルベルト・モラヴィアが来ていた記憶がある。たしか当時の国際ペンクラブ会長だった。敗戦時から鎌倉市に住んでいた関係から、聞いたり見たりした作家の実物が多数参加している大会はそこにいるだけで価値があった。

二度目は井上靖が会長時代の一九八四年である。そして二〇一〇年三回目として実に二十五年ぶりに国際ペン大会を東京で開いた。招聘作家とプログラム作成さらには開催資金手当てで事務局は多忙を極めた。リーマンショック、さらにはギリシャの破産により世界経済は急速に下降しており苦戦しながら開催を実現した。

騒ぎが静まったころ村松、小谷ら三人がネクタイを持って崔書勉を訪問した。藤島を助けるあなたとは縁を切る、これはそのための最後の土産だ、と手厳しい。

「日本ペンクラブを私は国のものと見る。韓国ペンも国のものと見る。国として考えるならば、藤島はむしろ両国理解のために貢献した人物だ。ペンクラブを君らは自分の持ち物と見て言動の基礎としている。立場が違う」

以降、村松剛は崔に心酔したという。

この章にあたっては吉澤一成事務局長のお骨折りを頂戴した。日本パブリック・リレーションズ協会副会長（サントリ―東京広報部長）の要職にあったころから親しい仲である。